

もっと哀れなのは、そのインディアンを見ている我々だよな (The only thing more pathetic than Indians on TV is Indians watching Indians on TV.)」とクスクス笑う。そこには、今を生きる先住民の若者が「消えゆく運命にあるインディアン」をテレビで見、それを日常的に消費しているという皮肉がある。『スモーク・シグナルズ』は、アメリカの植民地主義的な歴史の中で翻弄されてきた先住民が、貧困や過去のトラウマに悩み、もがきながらも、強かに今を生きる姿を巧みに描き、大衆が抱くステレオタイプを書き換えようと働きかけるのだ。

このように、映画は先住民のステレオタイプの形成・流布の装置でありながら、先住民にそのステレオタイプに反論し、書き換える機会を提供する場にもなった。アカデミー賞における多様性の問題が叫ばれて久しい。現在では、映画に限らずとも様々な映像媒体を通し、マイノリティが自分たちを語り始めている。^{*5} 今後も引き続き、そこで投げかけられる多様性に注目していきたい。

*1 私はインディアンズステーキハウスには行ったことはないが、ステーキはリーズナブルかつ美味しいそうだ。

*2 ティピーとは、主にアメリカの平原部の先住民諸部族が利用する円錐型の移動式住居のことである。

*3 Smoke Signals Movie poster (USA), Photo 12 / Alamy Stock Photo (Image ID: R2H7T3)

*4 Smoke Signals, Photo 12 / Alamy Stock Photo (Image ID: B7WPDW)

*5 今、私が最も注目している作品は、2021年7月にアメリカのHuluで始まったFXオリジナルドラマ『リザベーション・ドッグス (Reservation Dogs)』である。オクラホマ州東部の田舎町に住み、カリフォルニア行きを夢見る先住民の若者たちの姿をコメディタッチで描くこの作品は『スモーク・シグナルズ』と同様、様々な「インディアン」ステレオタイプを笑いに変え、聴衆の固定観念に挑戦している。日本で公開されたらぜひ見てほしい。



中国出身の女性映画監督クロエ・ジャオが、アジア系としては、韓国のポン・ジュノ監督『パラサイト 半地下の家族』に続き、『ノマドランド』で第93回米アカデミー賞作品賞受賞の快挙を成し遂げた。そして、女性としては、ジェームズ・キャメロン監督『アバター』をおさえて栄誉に輝いた『ハート・ロッカー』のキャスリン・ビグローに次いで、史上2人目となった。逆にいえば、90年以上に渡るアカデミー賞の歴史のなかで、作品賞を受賞した女性監督はたった2人しかおらず、多様性、包括性の観点からいえば、アメリカの映画制作において、いかに女性が、非白人女性はさらに、マイナーな存在であるかを社会に直視させる出来事でもあった。

2010年代を振り返れば、アカデミー賞における多様性の欠如を非難した#OscarsSoWhite騒動、また、絶大な権力を掌握していた有名プロデューサー、ハーヴェイ・ワインスタインによるセクハラに対する裁判と#MeToo運動などがあり、そうしたなかアカデミーの改革はまったなしの状況でおこなわれつつある。そこで、2020年に新たな段階の改革内容として発表されたAcademy Aperture 2025の作品賞に関わる部分を参照し、『ノマドランド』の受賞理由、さらには、2021年11月公開予定のジャオ監督によるマーベル映画『エターナルズ』に対する改革の影響について検討したい。

アカデミー特別名誉賞を授与された黒人監督スパイク・リーが、白人ばかりがノミネートされているとして、授賞式をボイコットすると表明した2016年、映画芸術科学アカデミーは、2020年までに、女性と、取り上げられること

の少ない民族／人種コミュニティの数を2倍にし、国際会員を大幅に増やす、包括的なコミュニティへ向けた具体的な目標を設定した。^{*1}その結果、2015年と2020年の比較で、女性の会員数は2倍、^{*2}また、2020年にオスカーにノミネートされた女性の割合は31%と過去最高の値となった。だが、ノミネートされた有色人種は8%に下がり、変革の手を緩めるわけにはいかない状況で、^{*3} Academy Aperture 2025 が発表され、作品賞に関しては、2022年から「アカデミー包括基準様式」の提出が求められ、2024年からは、女性、特定の民族／人種、LGBTQ+の人々を具体的な人数、割合を採用するよう規定した以下の基準項目4つのうち2つを満たさなければならなくなった。

Standard A: On-Screen Representation, Themes and Narratives

Standard B: Creative Leadership and Project Team

Standard C: Industry Access and Opportunities

Standard D: Audience Development ^{*4}

『ニューヨーク・タイムズ』に長年寄稿してきたジャーナリスト、ジェシカ・ブルーダーによる同名ノンフィクションをもとにして、主演女優フランシス・マクドーマントはプロデューサーでもあり、もう一人のプロデューサー、ピーター・スピーアーズはゲイで、監督はクロエ・ジャオと、製作において（非白人の）女性やLGBTQ+が大きな役割を果たすとともに、女性に焦点を当てたドキュメンタリー風作品であること自体が、Academy Aperture 2025を推進するうえで、作品賞の選考上、無視できなかったであろうと推察したくなる。しかし、「エレガントに」現代アメリカが抱える矛盾を捉えた、というレビューがあるように、^{*5}主人公ファーンが川で水に浸るシーンなど、幻想的、詩的シーンが散りばめられ、政治的配慮がなくとも高評価に値するアート性がある。しかも、家族制度を問い直して、他の移動労働者とともに集合的な主体が形成されつつ、石の売買や、石が作り出す景観が反復的に取り上げられることで、先

進的な資本主義システムへの抵抗、あるいは、皮肉とともに、ヒトの歴史的時間を圧倒する強度を持って、悠久の自然の時間から連想される、終末的恐怖ではない、ポストヒューマンな癒しのヴィジョンが展開されており、こうした新たな文化表象の可能性を具現化したことが受賞の大きな理由の一つであったと考察できる。

そして、もう一つ興味深いのが、ファーンがエンタランスで佇む映画館で上演されているのが『アベンジャーズ』という、セットにおける遊びである。これは消費主義や新自由主義を助長するハリウッドのエンターテインメント作品に対する批判では決してない。なぜなら、ジャオはマンガ好きで、^{*6} マーベル最新作『エターナルズ』を製作してきた。予告編冒頭では、カメラは海面を飛びながら浜辺、その先の山並みを捉え、その後、宗教的、原始的な空間を浮遊する飛行物体が現れ、中国系イギリス人女優、ジェンマ・チャンのアップとなる。また、マーベル初の聴覚障がい者やゲイのスーパーヒーローが登場し、『ノマドランド』とはジャンルやテーマは異なるが、ジャオの作家性を際立たせるかたちで、人新世を圧倒する強度を持って、少数者たちが連帯してポストヒューマンな集合的主体を形成することが期待される。これは、ヒトと軍事テクノロジーのハイブリッド体たるアイアンマンが背負わされた新自由主義に対する、マーベル・シネマティック・ユニバース内部からの自立的修正となるかもしれない。

*1 <https://www.oscars.org/about/academy-aperture-2025>

*2 https://www.oscars.org/newmembers2020/pdf/2020_new_members_overview.pdf

*3 <https://www.thewrap.com/oscars-2020-women-record-31-percent-nominations/>

*4 <https://www.oscars.org/news/academy-establishes-representation-and-inclusion-standards-oscar-eligibility>

*5 <https://www.hollywoodreporter.com/movies/movie-reviews/nomadland-oscar-win-commentary-american-life-4172565/>

*6 <https://www.vulture.com/article/chloe-zhao-nomadland.html>